

編集委員会依頼論文

銀行経営のための数理的枠組み

池森俊文*

2019年3月30日投稿

概要

1980年代に始まった金融自由化によって銀行に要請されている「自主的な経営管理」を実現するための数理的枠組みを提示する。経営管理では経営破綻の回避が重要なテーマとなるが、一般的に経営破綻は、財務上は「収益性の破綻」または「流動性の破綻」として顕現化する。本論文ではそのうちの「収益性の破綻を回避するための数理的枠組み」を提示する。具体的には、銀行全体の複雑な損益プロセスを、「内部資金システム」によって比較的簡単な複数の業務部門別損益プロセスに分解し、「リスク資本の配賦」によって業務部門別に一定の収益性を確保する「収益性制御」と、損失発生を一定の範囲内に抑制する「リスク制御」を課すという方法である。

キーワード：金融自由化，自主的な経営管理，収益性管理，リスク管理，内部資金システム，リスク資本配賦，収益性制御，リスク制御

1. はじめに

邦銀の経営管理として従来から長く実施されていたのが、決算予想や部店別損益計算、主要取引先別利鞘計算などの管理会計であった。しかしその状況が変化したのが、米国発で1980年代に日本にも波及してきた「金融技術革新」¹であった。邦銀の経営管理手法はこれまでに次のような変遷を経て進化してきた。

1. 1 銀行の経営管理手法の進化

1. 1. 1 ALM (Asset Liability Management)

ALMは、第2次石油ショック時(1978年)に米国の金融引き締めによって発生した金利上昇と、それによって発生したS&L (Savings and Loans) 危機に際して、米銀で導入された経営管理手法である。ALMでは、金利変動に対して共に変動する資産からの受取利息と負債への支払利息を併せて管理する金利リスク管理と、資産と負債の資金フローを併せて管理する資金流動性管理から構成される。ALMの邦銀への導入は、赤字国債の大量発行によって金利が乱高下した1980年代半ばの頃であった。

* 統計数理研究所統計思考院 〒190-5862 東京都立川市緑町10-3 email: tikemori@ism.ac.jp
 ロボット投信株式会社 〒103-0025 東京都中央区日本橋茅場町1-8-1 茅場町一丁目平和ビル

¹ 金融技術革新とは、1970年代以降の不確実性の時代に対処するために米国で発生し、世界に普及・拡大した確率解析をベースとする金融技術。